

平成28年7月8日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

**2016年度（第31回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催**

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）
では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成28年7月22日（金）午後2時～

場所：一般社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-11 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

高知工科大学 名誉教授 赤澤 威 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

東京外国語大学 アジア・アフリカ
言語文化研究所 准教授 錦田 愛子 氏

京都大学 地域研究統合情報センター 准教授 村上 勇介 氏

早稲田大学 韓国学研究所 招聘研究員・事務局長 李 愛俐娥 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

ジャーナリスト 土井 敏邦 氏

以上

照会先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局（市村）
電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

2016年7月

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニアとする（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域）。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

4. 選考

(1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。

2016年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所 名誉教授	秋道 智彌 氏
国立民族学博物館 教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授・同大学図書館長	白杵 陽 氏
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 理事	小長谷 有紀 氏
東京外国語大学大学院総合国際学研究院 特任教授	島田 周平 氏

(2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2016年度

大同生命地域研究賞 受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「西アジア地域を基盤とした人類史構築への卓越した学術的貢献」
に対して

○高知工科大学 名誉教授 あかざわ たける
赤澤 威 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「中東地域における離散パレスチナ人難民に関する
人類学的・政治学的研究」に対して

○東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授
にしきだ あいこ
錦田 愛子 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「ペルーを中心とするラテンアメリカの政治動態の研究」に対して

○京都大学 地域研究統合情報センター 准教授 むらかみ ゆうすけ
村上 勇介 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「朝鮮人に関するグローバルな地域研究の推進」に対して

○早稲田大学 韓国学研究所 招聘研究員・事務局長 り えりあ
李 愛俐娥 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「ジャーナリストとして長年にわたりガザのパレスチナ人難民を
映像記録として残した功績」に対して

○ジャーナリスト どい としくに
土井 敏邦 氏

2016年度
大同生命地域研究賞

赤澤 威 氏
(高知工科大学 名誉教授)

略 歴

赤澤 威 (あかざわ たける)

1. 現 職：高知工科大学名誉教授
2. 最終学歴：東京大学大学院理学系研究科人類学専門課程（1967年）
3. 主要職歴：1968年 東京大学総合研究資料館助手
1976年 国立科学博物館研究員
1979年 東京大学総合研究資料館助教授
1993年 同上 教授
1996年 東京大学総合研究博物館教授
1997年 国際日本文化研究センター教授（2004年 名誉教授）
1997年 総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2004年 名誉教授）
2004年 高知工科大学総合研究所教授
2015年 同上 名誉教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ① “*Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives.*” (H. Terashima and B. Hewlett 編著) Springer RNMH Series No. 4. 2016 (印刷中)
 - ② “*Learning Strategies and Cultural Evolution during the Palaeolithic.*” (A. Mesoudi and K. Aoki 編著) Springer RNMH Series No. 3. 2015
 - ③ “*Dynamics of Learning in Neanderthals and Modern Humans. Volume 2: Cognitive and Physical Perspectives.*” (共編著) Springer RNMH Series No. 2. 2014
 - ④ “*Dynamics of Learning in Neanderthals and Modern Humans. Volume 1: Cultural Perspectives.*” (共編著) Springer RNMH Series No. 1. 2013
 - ⑤ 『人類の移動誌』 (共著) 臨川書房. 2012
 - ⑥ 『人類大移動：アフリカからイースター島へ』 (共著) 朝日新聞社. 2012
 - ⑦ “*From the River to the Sea: The Paleolithic and the Neolithic on the Euphrates and in the Northern Levant.*” (共著) Cambridge: BAR International Series 1263. 2004
 - ⑧ “*Neanderthal Burials: Excavations of the Dederiyeh Cave, Afrin, Syria.*” (共編著) Auckland: KW Publications. 2003
 - ⑨ “*Ice Age Peoples of North America: Environments, Origins, and Adaptations of the First Americans.*” (共著) Oregon: Oregon State University Press. 1999
 - ⑩ “*Neandertals and Modern Humans in Western Asia.*” (共編著) New York: Plenum Press. 1998
 - ⑪ “*Prehistoric Mongoloid Dispersals.*” (共編著) Cambridge: Oxford University Press. 1996
 - ⑫ “*Humans at the End of the Ice Age. The Archaeology of the Pleistocene-Holocene Transition.*” (共著). New York: Plenum Press. 1996
 - ⑬ 『モンゴロイドの地球』 (共編著) 東京大学出版会. 1995
 - ⑭ “*The Evolution and Dispersal of Modern Humans in Asia.*” (共編著) Tokyo: Hokusensha. 1992
 - ⑮ “*The Other Visualized: Depictions of the Mongoloid Peoples.*” (共編著) University of Tokyo Press. 1992.

- ⑯ “*The Archaeology of Prehistoric Coastlines.*” (共著) Cambridge: Cambridge University Press. 1988
- ⑰ “*Hunters in Transition: Mesolithic Societies of Temperate Eurasia and their Transition to Farming.*” (共著) Cambridge: Cambridge University Press. 1986
- ⑱ “*Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan: New Research Methods.*” (共編著) University of Tokyo Press. 1986.
- ⑲ “*Windows on the Japanese Past: Studies in Archaeology and Prehistory.*” (共著) Michigan: Center for Japanese Studies. 1986

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考 : 1989年 学術博士 (東京大学)

業績紹介

「西アジア地域を基盤とした人類史構築への卓越した学術的貢献」に対して

赤澤威氏は西アジアをフィールドとする世界的な評価を得ている先史考古学・人類学研究者である。

西アジア地域は、アフリカで誕生した初期人類と現世人類（ホモ・サピエンス）が地球全域に拡散してゆく過程で最初に通過した地域であり、人類史を研究する上で重要な地域の一つである。同地域では、長らくヨーロッパ各国が人類学・考古学的調査を主導して行ってきたが、1961年以降は、日本も東京大学を中心とした調査隊を送り込み、ネアンデルタール人骨を出土したアムッド洞窟の発掘調査など、重要な成果を上げてきた。

赤澤氏は1967年に組織された「東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団」のメンバーに加わって以来、約50年にわたって西アジアにおいて先史人類学の研究を精力的に進めてきた。レバノン、シリア、ヨルダンなど広い地域で初期人類の遺跡探査を継続して行うなかで、旧石器遺跡を中心とする数多くの遺跡を発見・調査し、石器類や人骨片など国際的に注目される発掘資料を着実に蓄積していった。

その間、国内では、1989年～1992年に100人も的人文科学、社会科学、自然科学分野の研究者が参加する分野横断型の大型プロジェクト「先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略」（文部省科学研究費補助金重点領域研究）を組織し、人類の拡散の歴史とメカニズムを地球規模で解明した。この画期的な研究の成果は、国内外で出版され国際的にも高く評価された（Akazawa, and Szathmary (eds.), *Prehistoric Mongoloid Dispersals*. 1996, Oxford University Press など）。氏は、このプロジェクトを通して地域研究の総合化を推進した功績により、1993年に大同生命地域研究奨励賞を授賞した。

同年、氏がそれ以降に開始する更にスケールの大きな研究につながる重要な発見があった。シリア北西部のデデリエ洞窟でその数年前から現地の研究者と共同で続けていた発掘調査によって、考古学者が夢にまで描くネアンデルタールのほぼ完全な骨格を発掘したのである。当時、ネアンデルタール人骨は西アジアやヨーロッパなど各地で見つかっており、その数は数百にのぼっていたが、ほとんどが断片的な骨資料で、保存の良い全身骨格の揃った資料は初めてであった。

この貴重な子供の埋葬骨資料は、日本で詳細な研究が行われ、ネアンデルタールの復活プロジェクトへと展開した。赤澤氏を中心とする人類学やコンピュータサイエンス、美術解剖学などの専門家を含むメンバーは、全身骨格を復元した上で、さらに肉付けした復元人像を作成し、CGを駆使して歩行する動きを科学的に再現させることに成功した。出土人骨の計測のみに終わらない、氏のスケールの大きな学術的企画力と実行力がここでも発揮された。それまでほとんど具体的なイメージが復元されてこなかったネアンデルタール人について刺激的な成果を世界に広く示すことに成功したのである (Akazawa and Muhesen (eds.), *Neanderthal Burials: Excavations of the Dederiyeh Cave, Afrin, Syria. 2004*, KW Publications など)。

2010年からは、西アジアに研究の根幹をおきつつ、人類の進化史を正面に据えた大型プロジェクトを組織した。同プロジェクトは、我々現生人類が最終的に生き残った真相を解明するため、西アジアを中心に多く発掘されているネアンデルタール人骨および使用していた道具類を、現生人類のそれらと比較する壮大な内容で、考古学、文化人類学、理論生物学、環境科学、化石工学、脳科学など多様な専門分野の研究者が多数参加した。「ネアンデルタールとサピエンスの交替劇の真相:学習能力の進化に基づく実証的研究(2010-2014)」(文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究)として行われたこの研究では、脳の構造や機能、そして互いの学習能力の進化的違いが交替劇を生んだという仮説を立て、多様な分析研究を行った結果、両者の命運を分けたのはイノベーション能力の違いであったことを実証して世界を驚かせた。

世界的に見てもこれほど明確な研究目標をもって国際的に多くの研究者を巻き込んで行われたプロジェクトは数少なく、特に西アジアの先史人類遺跡や考古遺物に関して作成されたデータベースは大変貴重なものとなっている。研究成果は、科学分野の大手出版社 Springer から *Replacement of Neanderthals by Modern Humans Series* (全10巻)として2013年から継続刊行されており、国内外の主要な学術雑誌に好意的な書評が掲載されるなど、世界的に反響を呼んでいる。

赤澤威氏は、「過去から未来へ総合的に人間の歴史を知ることが可能にするのが21世紀のフィールドサイエンスである」という強い信念のもとに、歴史の重層した西アジア地域において、学際研究のもたらす推進力によって旧石器時代を総合的に描き出すことに成功し、新しい地域研究のあり方を発展させてきた。氏が進めてきた研究は、オリジナリティの高さをはじめ、国際化や一般化の側面も兼ね備えたもので、その学問功績は顕著である。

よって、選考委員会は一致して大同生命地域研究賞を授与することを決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2016年度
大同生命地域研究奨励賞

錦田 愛子 氏

(東京外国語大学 アジア・アフリカ
言語文化研究所 准教授)

略 歴

錦田 愛子 (にしきだ あいこ)

1. 現 職：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授
〔勤務先電話番号 042 (330) 5600〕
2. 最 終 学 歴：総合研究大学院大学文化科学研究科 地域文化学専攻 博士後期課程修了
(2007年)
3. 主 要 職 歴：2005年 日本学術振興会特別研究員 (DC2)
2007年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員
2009年 早稲田大学イスラーム地域研究機構 研究助手
2010年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
2014年 同上 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『移民／難民のシティズンシップ』（編著）〔有信堂高文社，2016〕
 - ②「紛争とともに住むこと——イスラエルとパレスチナの境界」堀内正樹編『＜断＞と＜続＞の中東——非境界の世界を遊ぶ』（悠書館，2015）
 - ③「ハマースをめぐる政治とガザ戦争」〔『中東研究』522，2015〕
 - ④「パレスチナ——ハマース否定が導いた政治的混乱」青山弘之編『「アラブの心臓」に何が起きているのか——現代中東の実像』（岩波書店，2014）
 - ⑤「パレスチナ女性の語りに見る抵抗運動——ナショナリズム運動との関わり」福原裕二・吉村慎太郎編『現代アジアの女性たち——グローバル化社会を生きる』（新水社，2014）
 - ⑥「ハマースの政権掌握と外交政策」〔『国際政治』177，2014〕
 - ⑦“Palestinian Migration under the Occupation: Influence of Israeli democracy and Stratified citizenship” co-authored with Shingo Hamanaka〔Sociology Study 3(4)，2013〕
 - ⑧「パレスチナ人のグローバルな移動とナショナリズム——「中心」を相対化する「周辺」の日常実践」三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ——人類学、歴史学、地域研究の現場から』（弘文堂，2012）
 - ⑨「パレスチナにおける抵抗運動の変容」酒井啓子編『中東政治学』（有斐閣，2012）
 - ⑩「並存するナショナル・アイデンティティ——離散パレスチナ人によるパスポート、通行証の選択的取得をめぐって」陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる編『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』（新曜社，2012）
 - ⑪「パレスチナ／イスラエル——国家案の再考——国家像をめぐる議論の展開とシティズンシップ」〔『経済志林』79(4)，2012〕
 - ⑫「パレスチナにおける社会運動とインターネット利用——二〇一一年「アラブの春」とフェイスブック上での抗議運動の展開」〔『地域研究』12(1)，2012〕
 - ⑬「ヨルダン・ハーシム王国におけるアラブ大変動の影響——内政と外交にかかわる政治・社会構造および直面する課題」酒井啓子編『＜アラブ大変動＞を読む——民

衆革命のゆくえ』〔東京外国語大学出版会、2011〕

- ⑭「レバノン政治とパレスチナ人の就労問題——2010年の法規制緩和と帰化をめぐる議論」〔『中東研究』510, 2011〕
- ⑮「パレスチナ人であるという選択——アイデンティティと国籍、市民権をめぐる可能性」ミーダーン〈パレスチナ・対話のための広場〉編『〈鏡〉としてのパレスチナ——ナクバから同時代を問う』〔現代企画室, 2010〕
- ⑯「ヨルダンにおけるガザ難民の法的地位——UNRWA登録, 国籍取得と国民番号をめぐる諸問題」〔『イスラーム地域研究ジャーナル』2, 2010〕
- ⑰『ディアスポラのパレスチナ人——「故郷（ワタン）」とナショナル・アイデンティティ』〔有信堂高文社, 2010〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2007年 文学博士（総合研究大学院大学）

業績紹介

「中東地域における離散パレスチナ人難民に関する人類学的・政治学的研究」に対して

錦田愛子氏は、中東地域、とりわけヨルダンとレバノンに居住するディアスポラ（離散）のパレスチナ人難民を対象に、その社会的・政治的状況とアイデンティティについてフィールド調査に基づいて実証的に研究してきた。また難民を取り巻く状況を同時代的に明らかにするため、パレスチナ、レバノン、およびヨルダンの政治体制や法制度の研究にも取り組んでいる。こうした調査研究は、離散パレスチナ人の生活の営みを地域全体の動向の中に位置づけて理解しようとする試みとして、高く評価されるものである。

同氏の研究の基礎となるのは、2年間にわたるヨルダンおよびパレスチナ自治区でのフィールドワークである。その調査滞在期間中に習得されたアラビア語のパレスチナ方言やインフォーマントとの信頼構築の手法は、その後の聞き取り調査においても活用されている。ヨルダン国内のパレスチナ社会とパレスチナ自治区とのつながりを、親族関係や人々の往来を通して明らかにした博士論文での研究は、その嚆矢となるものである。ヨルダン人口に占めるパレスチナ人の割合が高いことはよく知られるが、彼らのナショナル・アイデンティティや帰還権に対する意識は、政治的にセンシティブであり統計上は明らかにし得ないテーマである。その点について同氏は、多様な社会階層のパレスチナ人がヨルダンに住みながら「故郷」（アラビア語でワタン）との間で築く関係性の分析を通して、多面的かつ実態的に描き出すことに成功した。

イスラエル建国後、ディアスポラの状態におかれたパレスチナ人難民について、同氏の研究はさらに地域間の比較研究へと展開している。パレスチナ人の主要な離散の地のひとつである隣国レバノンは、パレスチナ人難民に国籍・市民権を与えないという意味で厳格であるという点で、国籍・市民権を与えたヨルダンとは正反対の立場をとっている。その対照性について、同氏は両国において難民がおかれた法制度上の位置づけの違いに注目して、研究成果を出している。なかでも国籍・市民権を採り上げることで、比較の俎上に載せられにくいパレスチナ人難民の直面する課題の分析を、シティズンシップ研究の一環として行ったことは、学術的にも価値が高い。また、こうした制度的側面への着目は、同氏がレバノン国内のパレスチナ人難民問題や、ヨルダン国内での無国籍のパレスチナ人、すなわちガザ難民の問題など、政治的側面に対する調査が困難なテーマについて取り組むことのできる研究枠組みを提示することとなった。

2011年に「アラブの春」と呼ばれた政治変動の開始以降、同氏の研究関心は中東地域研究として、中東各地に離散する難民を取り巻く政治変動や政治体制そのものにも向けられてきた。パレスチナ人難民をめぐる状況を明らかにするためには、難民自身についての内在的な理解だけでは不十分であり、難民の居住する地域社会や政治的動向をも同時に捉える必要があるという、より包括的な中東地域研究に向けた問題認識を示すものである。

このように政治変動の観点からの中東地域研究を展開する一方で、人の移動とアイデンティティをめぐることも氏はその問題関心を広げている。パレスチナ人難民のみならず、中東アラブ地域からヨーロッパ諸国に向かう移民や難民にも関心が向けられているが、その際、アラビア語話者の移民や難民に調査対象を限定してフィールドワークを重ねている。地理的・空間的に調査対象を移して、これまでの分析手法と考察枠組みを適用することで、中東地域研究の新たな展開の可能性を示しているといえるだろう。

これらの研究成果について、同氏は国内学会のみならず、国際的な研究集会においても積極的に発信を続けてきた。またイスラエルで2年間在外研究を行い、ヘブライ語の習得に努めるなど、中東地域研究をより深めるための努力も怠っていない。

さらに同氏は、個人研究だけでなく、共同研究組織者としても数多くのプロジェクトを手がけており、学会でも責務をこなすなど、現代中東地域研究を率いる優れた若手研究者の一人といえる。

以上の理由から、錦田氏は今後のさらなる活躍が期待されるものであり、地域研究奨励賞にふさわしい将来が囑望される研究者である。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2016年度
大同生命地域研究奨励賞

村上 勇介 氏

(京都大学 地域研究統合情報センター
准教授)

略 歴

村上 勇介 (むらかみ ゆうすけ)

1. 現 職：京都大学地域研究統合情報センター准教授
〔勤務先電話番号 075 (753) 9614〕
2. 最 終 学 歴：筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了 (1991 年)
3. 主 要 職 歴：1987 年 メキシコ国立自治大学国際関係センター研究員
1991 年 在ペルー日本国大使館専門調査員
1994 年 在ペルー日本国大使館理事官
1995 年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手
2002 年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授
2006 年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
2007 年 同上 准教授
現在に至る
4. 主 な 著 書 ・ 論 文：
 - ① 『融解と再創造の世界秩序』 (共編著) [青弓社、2016 年]
 - ② 『21 世紀ラテンアメリカの挑戦—ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』 (編著)
〔京都大学学術出版会、2015 年〕
 - ③ *La actualidad política de los países andinos centrales en el gobierno de izquierda.* (『左派政権下の中央アンデス諸国における政治の現在』編著) Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2014.
 - ④ *América Latina en la era posneoliberal: democracia, conflictos y desigualdad.* (『ポスト新自由主義期のラテンアメリカ—民主主義、紛争、不平等』編著) Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2013.
 - ⑤ *Dinámica político-económica de los países andinos.* (『アンデス諸国の政治経済変動』編著) Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2012.
 - ⑥ *Perú en la era del Chino: la política no institucionalizada y el pueblo en busca de un Salvador.* 2ª. edición (『フジモリ時代のペルー—制度化しない政治、救世主を求める人々』第2版) Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2012. (第1版 2007 年)
 - ⑦ “ ‘Aquí las personas cambian, teniente, nunca las cosas’ : una reflexión sobre la política peruana actual desde una perspectiva institucional.” (「『ここでは人は代わるのだが、ものごとは変わらない』—制度の視点からのペルー政治に関する一分析」) *Argumentos* (Lima: Instituto de Estudios Peruanos), 6 (1), 2012.
 - ⑧ *Enduring States: in the Face of Challenges from Within and Without.* (coeditor) Kyoto: Kyoto University Press, 2011.
 - ⑨ “Fuerza y límites del ‘fujimorismo sin (Alberto) Fujimori’ .” (「『 (アルベルト)フジモリなきフジモリ路線』の強さと弱さ」共著) En Carlos Meréndez (ed.), *Anti-candidatos: guía analítica para unas elecciones sin partidos.* Lima: Aerolíneas Editoriales S.A.C., 2011.

- ⑩ 「フジモリ後のペルーにおける軍人の政軍関係への認識—意識調査からの一考察」〔『ラテンアメリカ研究年報』30、2010年〕
- ⑪ 『現代アンデス諸国の政治変動—ガバナビリティの模索』（共編）明石書店、2009年。
- ⑫ 「地域社会開発への住民参加—ペルーの事例から」篠田武司・宇佐見耕一編『安心社会を創る—ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』新評論、2009年。
- ⑬ “Putnam’s Social Capital Theory and Democracy in Peru: An Analysis Based on the Studies about the Political Attitudes and Participation of Popular Sectors in Lima”. In Tomomi Kozaki, Naoya Izuoka, and Yuko Honya (eds.), *Civic Identities in Latin America?* Tokyo: Keio University Press, 2008.
- ⑭ 「ペルーの2006年選挙の分析」〔『地域研究』8(1)、2008年〕
- ⑮ 「ペルーの選挙運動—2000年選挙におけるある国会議員候補の事例」〔『地域研究』7(1)、2005年〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2011年 筑波大学博士（政治学）

業績紹介

「ペルーを中心とするラテンアメリカの政治動態の研究」に対して

村上勇介氏は、ペルーを中心とするラテンアメリカ諸国の国家と社会について、フィールド調査に基づく実証的な研究を行ない、国内外で高く評価されている地域研究者である。

村上氏の研究は三つの柱をもつ。一つは、政治のマクロ的分析である。1970年代終わりから「民主化」が進んだラテンアメリカでは、民主主義体制が十分定着せず不安定化する例も多く見られた。不安定化する要因として、各国の持つ歴史的な経緯や構造的な背景があることに着目した氏は、ペルー政治を対象としてフィールド調査と文献調査を合わせた研究を行った。1990年代のフジモリ政権期を分析した著書『フジモリ時代のペルー：救世主を求める人びと、制度化しない政治』（2004年、平凡社）は、民主主義か権威主義かという体制分類よりも、政治秩序が制度化を欠いている点にペルー政治の特質があると強調した卓越した内容である。本書は、日本貿易振興機構アジア経済研究所の発展途上国研究奨励賞を受賞するなど高く評価され、スペイン語に翻訳されたものは、現在に至るまで版を重ねている。

第二の柱は、第一の柱のマクロ分析を検証するために行うミクロレベルの調査研究である。氏は、ペルーの国会議員候補者の選挙運動の過程を丹念に観察したほか、1998年以降はペルー中部の都市を対象とし、地方選挙をめぐる政治過程の詳細な調査分析を続けている。選挙過程に参加しつつ実施した調査では、候補者の選ばれ方や選挙運動の展開過程、候補者と有権者との間の相互作用関係などの微視的な観点からの資料を集積してきた。学術論文や研究集会で発表されたこれらの成果は、マクロ分析で得られたペルー政治の特質を再検討するのに欠かせない貴重な資料であるばかりか、それ自体が臨場感ゆたかなモノグラフとなっている。

第三の柱は、政治に関わる人々の意識そのものに分析視点を据えた研究である。氏は、アンケート調査や政治社会運動への人々の関わり方に関して研究をおこない、政治関心、政治や政治家に対する認識、政治経験、民主主義観といった点について分析を積み重ねてきた。その成果の一つ『下層の人々にとっての民主主義：リマ下層民の政治意識と政治行動に関する一分析』（2000年、スペイン語）は、米国において非常に高い評価を得ており、政治学や社会学を教えるペルーの大学では標準テキストの一つになっている。

近年は、ボリビア、コロンビア、エクアドル、ベネズエラなどのアンデス諸国、そしてラテンアメリカ全体の比較研究へと研究範囲は広がりつつある。具体的には、政治経済動態や新自由主義の政治社会への影響をテーマとしたもので、刊行した書籍や論文は数多くの書評や報道で取り上げられるなど、特に現地で大きな関心を集めている。また、中東欧・ロシアや中東などラテンアメリカ以外の地域との比較にも着手し、共編著『ネオリベリズムの実践現場：中東欧・ロシアとラテンアメリカ』（2013年、京都大学学術出版会）を刊行するなど、日本のラテンアメリカ地域研究を深化させ、かつその地平を拓ける活動も積極的に進めてきている。

村上氏の研究成果は前出のものをふくむ12冊の著書、編著書（日本語6冊、英語1冊、スペイン語9冊）として世に出され、特にスペイン語による出版物に対する国際的な評価は非常に高い。ラテンアメリカに関する代表的な研究を選抜して紹介する米国議会図書館責任編集の書誌年鑑(HLAS)には、氏の7冊の研究書が掲載されていることがそれを顕著に示している。

国内では、日本ラテンアメリカ学会や地域研究コンソーシアムの理事や事務局長を務め、ラテンアメリカ関連の大きな国際研究大会を事務局責任者として日本において成功させるなど、ラテンアメリカ地域研究の中心人物の一人として第一線で活躍している。国外では、アジア太平洋地域のラテンアメリカ研究機関の協議組織であるアジア太平洋ラテンアメリカ研究協議会会長の任にもある。

以上のような卓越した研究業績に加えて、近年は、森林保全ガバナンス構築に関するJICA国際協力プロジェクトなどの実践的な活動にも関与しており、研究の成果を地域開発の実践につなげる同氏の試みは、地域研究の新しい方向性を示すものでもあり高く評価できる。

以上のような村上勇介氏の研究能力や学術活動の実行力などを高く評価し、さらにまたラテンアメリカ地域研究の新たな展開を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2016年度
大同生命地域研究奨励賞

李 愛俐娥 氏
(早稲田大学 韓国学研究所
招聘研究員・事務局長)

略 歴

李 愛俐娥 (り えりあ)

1. 現 職：早稲田大学韓国学研究所招聘研究員
〔勤務先電話番号 03 (5286) 1980〕
2. 最 終 学 歴：京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 (2000 年)
3. 主 要 職 歴：
 - 2000 年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター研究員
 - 2008 年 国立地球環境学研究所客員研究員
 - 2009 年 京都大学地域研究統合情報センター客員研究員
 - 2010 年 東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター特任教授
 - 2014 年 早稲田大学韓国学研究所上級研究客員教授兼事務局長
 - 2016 年 早稲田大学韓国学研究所招聘研究員兼事務局長
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『沿海州における北朝鮮労働者の実態と人権』共著〔韓国統一研究院, 2015〕
 - ②『さらば愛しい平壤』編訳〔平凡社, 2012〕
 - ③『東北アジアの韓民族社会の歴史的形成過程および実態』共著〔韓国統一研究院, 2004〕
 - ④『中央アジア少数民族社会の変貌—カザフスタンの朝鮮人を中心に—』著書〔昭和堂, 2002〕 (第 19 回大平正芳記念賞)
 - ⑤「沿海州地域における苦闘する多文化韓人たち」『韓民族の海外同胞の現住所』〔ハクヨン文化社, 2012〕
 - ⑥「沿海州コリアンコミュニティの現状にみるもの」『グローバル化と韓国社会』〔国立民族学博物館, 2007〕
 - ⑦「ロシア沿海州地域における中国朝鮮族の現状」『朝鮮族のグローバルの移動と国際ネットワーク』〔アジア経済問題研究所, 2006〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考：2000 年 博士 (人間・環境学) (京都大学大学院)

業績紹介

「朝鮮人に関するグローバルな地域研究の推進」に対して

李愛俐娥(李エリア)氏は、韓国やコリアンタウンを中心とする朝鮮人研究とは異なり、中央アジアやロシア沿海州などを対象に、現地調査にもとづく朝鮮人に関するグローバルな地域研究を新たに開拓した。さらに、日本の諸大学における韓国学に関する研究所の設立に貢献するなど、幅広い研究活動を実践している点においても高く評価される。

李エリア氏の研究は大きく二つに分けられる。

第一に、「高麗人」と呼ばれる中央アジアの朝鮮人に関する研究である。

李エリア氏は、20世紀半ばに旧ソ連極東地域からカザフスタンを中心に中央アジアに強制移住させられた朝鮮人社会について、ソ連崩壊直後1990年代に現地調査が可能となった好機を捉えて、現地のアーカイブズ調査とともに、アンケートを含む聞き取り調査を行い、社会主義時代からポスト社会主義期までの社会変容を明らかにした。

アーカイブズ調査として、ロシアだけでなくカザフスタンの中央および地方の史料を幅広く渉猟することによって、旧ソ連時代には閲覧できなかった秘密文書の発見などの成果がもたらされた。

聞き取り調査としては、スターリン時代の1937年に沿海州から中央アジアに強制移住された経験をもつ数少ない朝鮮人への証言を得るとともに、同氏が注目したのは、朝鮮語で「ゴボンジル」(相互扶助の意)と呼ばれる農業経営の独特の方式である。旧ソ連圏で実施されていた集団農場の下部組織「ブリガード」を家族など親類縁者によって構成し、出稼ぎ請負農業に従事するという、エスニック集団による創意工夫に関して、先駆的な研究成果がもたらされた。

このように、歴史学および社会学の方法論を学術的に組み合わせた研究成果は、中央アジアの朝鮮人に関する日本で初めての学術書として刊行され、日本の地域研究の展開に大きく貢献した。

第二に、ロシア沿海州における多文化・多国籍のコリアン研究の一環として取り上げられた北朝鮮からの派遣労働者や、中国国境付近における脱北者に関する研究である。

上述の高麗人のふるさとと言えるロシア沿海州において2000年代から現地調査を続けてきた李愛俐娥(李エリア)氏は、中国での脱北者の調査を活かすことによって、現在進行中

の、ロシアに派遣された北朝鮮労働者の実態調査を行い、組織的な出稼ぎ労働を課題として取り上げることに成功した。人びとの劣悪な労働環境の実態に関する研究成果は、すでに韓国語によってまとめられ、世界で初めての学術的報告書として海外から注目されており、現在、日本語と英語に翻訳中である。

このような、看過されがちな、アジアの現代的な課題を可視化する同氏の取り組みは、日本を基盤にして、中国、ロシア、韓国など北東アジア一帯の朝鮮人コミュニティの国際的なネットワークを活かすという独特の方法論に立脚しており、日本における地域研究の優位点を明示している。日本の地域研究が世界の平和構築に資するうえでの、新しい流れとなるだろうと期待される。

さらに付言すべきは、彼女の国際的な研究活動の旺盛さである。上述のような国境を越えた朝鮮人コミュニティのネットワークに加えて、朝鮮人研究者のネットワークを背景にして、日本の大学等研究機関で国際的な研究活動の運営に従事してきた。例えば、国立民族学博物館に付置されていた地域研究企画交流センターにおいては、脱北エリートを招いて北朝鮮に関する会議を組織し、2003年には東北アジアのコリアンネットワークをテーマに6者会議のなかで北朝鮮を除く5か国の駐日大使を集めて国際シンポジウムを開催、2005年には南北首脳会談の当事者である韓国の金大中前大統領を招くなど、朝鮮半島問題に大きな関心をもたらした。また、同センターが移管された京都大学地域研究情報統合センターにおいても、同様の会議を組織した。2010年には東京大学大学院に現代韓国研究センターを設立、2013年には早稲田大学韓国学研究所の設立にあたり韓国の諸財団の財政的支援を得るなど、日本における韓国学研究の拠点形成にも大きく寄与している。

以上のようなこれまでの日本における研究活動全般に対して、李愛俐娥(李エリア)氏に深い敬意を払い、朝鮮人に関するグローバルな研究のさらなる推進を期待して、地域研究奨励賞に選定するものである。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2016年度
大同生命地域研究特別賞

土井 敏邦 氏
(ジャーナリスト)

略 歴

土井 敏邦 (どい としくに)

1. 現 職：ジャーナリスト
2. 最終学歴：広島大学総合科学部 (1981年)
3. 主要職歴：ジャーナリスト
4. 主な著書・映像作品：

【著書】

- ① 「ジャーナリストはなぜ『戦場』へ行くのか」 (共著・集英社新書/2015年)
- ② 「”記憶”と生きる一元『慰安婦』姜徳景の生涯」 (大月書店/2015年)
- ③ 「ガザの悲劇は終わっていない」 (岩波ブックレット/2009年)
- ④ 「沈黙を破る一元イスラエル郡将兵が語る“占領”」 (岩波書店/2008年)
- ⑤ 「パレスチナの声 イスラエルの声」 (岩波書店/2004年)
- ⑥ 「『和平合意』とパレスチナ」 (朝日新聞社/1995年)
- ⑦ 「アメリカのユダヤ人」 (岩波新書/1991年)
- ⑧ 「アメリカのパレスチナ人」 (すずさわ書店/1991年)
- ⑨ 「占領と民衆—パレスチナ—」 (晩声社)

【映像作品】

- ⑩ 「ガザに生きる」 (5部作/2015年)
- ⑪ 「”記憶”と生きる」 (2015年)
- ⑫ 「飯舘村—放射能と帰村」 (2013年)
- ⑬ 「異国に生きる—日本の中のビルマ人—」 (2012年)
- ⑭ 「”私”を生きる」 (2010年)
- ⑮ 「沈黙を破る」 (2009年)

以上のほか、現在に至るまで著書・映像作品多数

業績紹介

「ジャーナリストとして長年にわたりガザのパレスチナ人難民を
映像記録として残した功績」 に対して

土井敏邦氏は1985年以来、パレスチナやイスラエルをはじめ、世界各地を精力的に取材してきた。その取材の成果は、『アメリカのパレスチナ人』すずさわ書店、1991年、『アメリカのユダヤ人』岩波新書、1991年、『「和平合意」とパレスチナ』朝日新聞社朝日選書、1995年、『パレスチナ ジェニンの人々は語る』岩波書店岩波ブックレット、2002年、『パレスチナの声 イスラエルの声』岩波書店、2004年、といった作品群に示されているように、パレスチナ人に関するルポルタージュを中心とした書籍の出版であった。

土井氏のルポルタージュの文体の特徴は、長時間にわたるインタビューに基づいて、映像をそのまま活字化したような、視覚的な強烈なイメージを喚起するものである。そのため、読者は土井氏の描く臨場感のともなう独特の世界に誘い込まれ、土井氏とともに現場をともに目撃しているかのように、追体験のできる読書体験をもつことになる。

土井氏は同時に、1993年よりビデオ・ジャーナリストとしての活動も本格的に開始し、報道映像やドキュメンタリー作品をテレビ・映画・DVDで発表するようになった。そのドキュメンタリー作品の特徴は、ナレーションや音楽など余分な要素を排して、簡単なキャプションだけをつけ、関係当事者に直接語らしめるというドキュメンタリー制作上の手堅い手法を採用している。したがって、その映像からは現場に吹き渡る風と音、人びとのざわめき、自動車のエンジン音といった生活音もそのまま録音されることになり、取材現場の空気がそのまま伝わってくるという臨場感をともなっている。映像を通して撮影対象そのものに語らしめる手法をとることで、逆に真に迫る絶大な効果を上げることに成功している。

土井氏のDVD映像ドキュメンタリーの代表作は『ファルージャ 2004年4月』2005年、『沈黙を破る』2009年、(キネマ旬報ベスト・テン【文化映画部門 第1位】／日本映画ペンクラブ賞【文化映画 ベスト 1】／石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞)、『“私”を生きる』2010年(2010年度・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル奨励賞受賞)、『異国に生きる—日本の中のビルマ人』2012年(文化庁映画賞 文化記録映画優秀賞)である。土井氏は以上のようなドキュメンタリー作品によって数々の賞を受賞しており、文字通り日本を代表するドキュメンタリー記録映画監督であると高く評価できる。

さらに、土井氏のジャーナリストとしての功績で特に強調しなければならないのは、パレスチナのガザ地帯における長年の定点観測によって撮影した DVD 作品である。ガザは 1967 年以來、イスラエルの占領下にあったが、2005 年にイスラエル軍がガザから撤退し、以後、現在に至るまで封鎖状態にある。土井氏は、パレスチナ人難民一家の住宅に住み込み、その場所を定点観測地点として設定して、1980 年代終盤以降、四半世紀以上にわたってガザに住むパレスチナ難民家族を中心に撮影し、その時々のパレスチナ人指導者を含めてパレスチナ人の日常生活とその破壊の実態を継続的に取材してきたのである。そして、長年蓄積してきた映像記録を編集し、その集大成として 2015 年に『ガザに生きる』5 部作として DVD 化したのである。この作品は、パレスチナを代表する人権活動家の弁護士ラジ・スラーニの解説を通して、第 1 次インティファダ（民衆蜂起）（1986 年）からガザ攻撃（2008～2009 年）までのガザの同時代史を映像でたどったものである。本作品は、第 1 章「ラジ・スラーニの道」、第 2 章「二つのインティファダ」、第 3 章「ガザ撤退とハマス」、第 4 章「封鎖」、第 5 章「ガザ攻撃」の 5 部で構成されている。

同時に、『ガザに生きる』は日本語版とともに英語版も制作された。また、同作品はパレスチナ人政治指導者のインタビューも多数収録されており、パレスチナ現代政治史を考える上できわめて資料的価値があるものであり、欧米諸国の大学等でも上映され、国際的にも非常に高く評価されている。

以上の理由から、土井敏邦氏は大同生命地域研究特別賞にふさわしい功績を挙げたジャーナリストとして顕彰するものである。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)